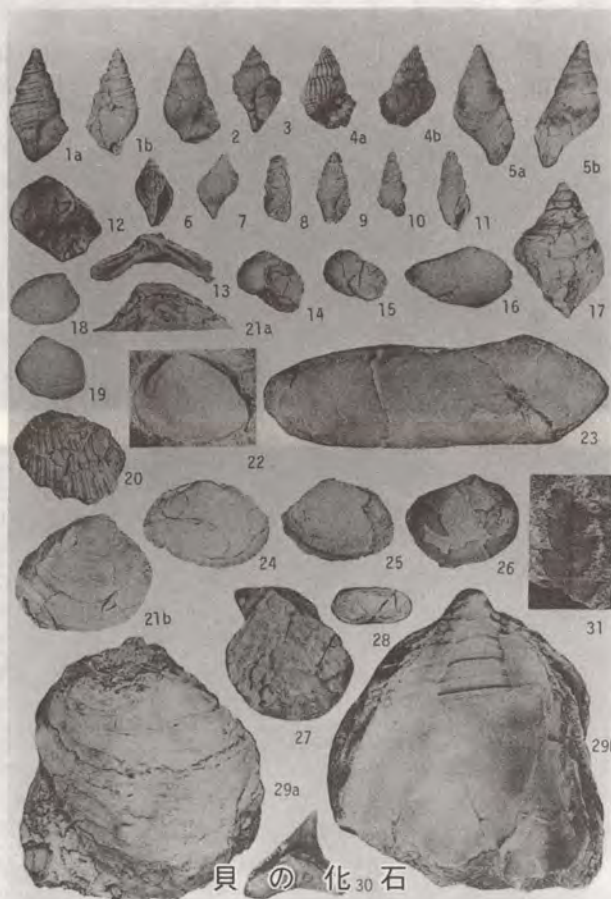


留萌の地層 ②

VOL 94

留萌いま・むかし



貝の化石

新生代前期中新生約三千五百万年前になると、南と北から海が北海道に侵入し初め、留萌はその南の入り江の一番奥に位置するようになった。そして、ここには暖かい海にすむ生物たちがすんでいた。このときに出来たのがユードロ層という地層でユードロの沢にみられる。この層の中からは暖かい海にすむウミナ、シラトリヤガイ、ユキノアシタガイの仲間や、デスモスチルスというサイヤカバに似た大型の動物の化石がでてくる。また、この層からは石油がしみだしており、何度か石油探査が行われたことがある。

しかし、南北の海の侵食は続き、ついに南と北の海が連なり、段々と深さを増し、留萌近辺でも深さ二千五百mくらいまで沈んでいった。約二千五百万年くらい前の中新生後期のことである。これは日本列島がちょうど大陸から離れ始めた時期とかなる。この深い海に降り積もった土砂が堆積したのが峠下層、増毛層という地層である。この中からは海にすむ動物の化石がでており、特にこの層から初めて世界に報告されたものも少なくない。ルモエカシバウニ、トーゲシタホタテ、リュキュウサルポーなどの貝の化石である。

約二百万年前以降留萌の地表はいろいろな侵食や堆積をくりかえし、現在の留萌の姿に近づいていったのである。それはまた、留萌に人のすみ始めるずっと前の話である。

福士 広志

海のふるさと館 長
学芸係

ふくし・ひろし
昭和28年生まれ。41才。
同58年留萌市役所入庁。
同60年より本稿執筆